九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

精神的孤獨感について（世紀病の一形式 ： 浪漫派及びパルナシヤンに於ける精神的孤獨感について）

ルネ・カナ

須川, 彌作

https://doi.org/10.15017/2557035

出版情報：文學研究. 19, pp.95-111, 1937-05-27. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

精神的孤獨感に就いて

（世紀病の一形式―浪漫派及びパルナシヤンに於ける精神的孤獨感について）

ルネ・カナ
須川彌作譯

序

私は世人の呼んで「世紀病」と稱したものの形の一つを研究したいと思ふ。十九世紀が嘗めた悲哀のあらゆる動機の中で、私の見るところでは、精神的孤獨、ブルジェ氏[1]のいはゆる「かくかくの個人のではなく近代人自身の運命ともいへる程、今日の多くの人が陷つてゐるあの精神的孤獨」が最も烈しいものであつた。

（一） *Etudes et portraits,*（ヴイニーに關する項）。

嚴密にいへば、これは十九世紀に事新しく始つたものではない。孤獨な魂は何時にもあつたのだから、我々は何ら

これを發明したのではない。ラマルチーヌが歎息して、「ただひとりの人がゐない。そしてすべてが荒涼としてゐる。」と云つたのは、人の心の如く古くからあるあの單純な憾みのさびしさを「孤立」*Isolement* の中で語つたのに過ぎない。そして彼が「この流謫の地になぜ自分はまだ止つてゐるか？」と附け加へたのは、多くのモラリストや、*Ecclésiaste* や、*Imitation* の著者の後を承けて、我々の「涙の谷」に就てのキリスト教的思想のために深められたあの世とあの世の生活へのあこがれを表はしたのである。そしてシャトーブリヤンも亦我々の憂愁の形成に於けるこのあこがれの重大性を指摘してゐる。（情熱の波の章）。

しかしかかる悲哀は常に癒される道があつた。かくも荒涼たるわが十九世紀にあつてすらも、癒されてゐた。信者としての信仰が、最後に、この流謫を堪へしめ、また消え去つた戀の憾みは、ミュッセの如き最も絶望的な人にあつても、新しい戀の期待の裡に癒された。即ち「戀をしたなら、絶えず戀しなければならぬ」と稱し、或はなつかしい過去の思ひ出に慰められて、「私はこの寶を私の不滅の魂の中に埋めて置く」と稱してゐる。

精神的孤獨が、かくも速かに、かくも深く、一群の人々、しかも多くの點で非常に異つた人々に、共通な悲哀となつたのは、一の同じ時期、時期といふ言葉がいけなければ同じ世代といつてもいいが、一八一五年の時期が、その周圍に、この感情の發顯に有利な情狀の異常な協力を得たからである。他の點と同じくこの點でも、シャトーブリヤンの影響を大きく見積らなければならないのは、確かである。精神的孤獨はまことにルネの病であつた、「私はひとりであつた、地上にひとりであつた……人間の住ひに輝く灯を見ながら、人の住むあんなに多くの屋根の下に、私には一人の友もないと思ふのであつた。」この叫びは純粋に利己的である。ルネは人を愛せず、理解もしない。その孤獨

は、自分はユニークであり、優れた者であるといふ感情である。即ちこの病の源には、常に多少の傲慢があることになる。それに、シャトーブリヤンは外部に對して打ち解けることが出來なかつたし、絶えずその自我と差し向ひになつてゐながら、自分自身に對しても打ち解けることが出來なかつた。彼は自分の姿を崇拜し、その姿が彼の野望に一致したと感じる喜びを求めてゐた。しかし彼の魂の一部分は、彼にとつてはすつかり無緣であり、そのために彼は苦しんだ。彼は自分自身の神祕の中にはひれないのを感じてゐた。曰く、「私は私の心を測り、自分が何を望むかを自問し始めた。私はそれを知らなかつた、しかし私は突然、森は氣持がいいだらうと思つた。」情熱の波に翻弄された彼は、「その心の惡魔」を如何に滿足させるかを知らなかつた。そして、それから、その霧のかかつた自我の中で自分に分らない一切のものに無緣であつた彼は、自分がはつきりさせ、捉へ得る一切のものに對しても無緣であつた。無限に飢ゑ、非常に意欲的な彼は、夢と現實との奇妙な不均衡を知つた。彼の最も望んだ享樂も、一度彼の手に歸すると、失はれてしまふ。その享樂はもはや彼の心に話しかけなかつたのである。その魂は豐富であるあまり、置き去りにされ、空虛のままになつてゐた。かくて、女神のマントを手に入れると、「サランボーはその夢想の成就したのを前にして、物思はしげになつた。」

傲慢及び人間に對する輕蔑、意欲的な利己主義及び飽くことなき「感覺」の追求、精神的不統一及び魂の實際の要求に對する無知、これこそ確かにルネの遺產であり、そしてすべてこれらが孤獨の激發の中に見られるのは確かである。しかしシャトーブリヤンがこの歎きを第一に發したとしても、彼にあつては多分の滿足と享樂が混入してゐたことを認めなければならない。彼は自身に對し、多くの憐憫を抱いてゐたが、またそこには多分の讃歎の念を混じてゐ

た。彼は自身の上をあまりに哭き、哭いては樂しんだ。傲慢から發したその孤獨は、傲慢の念を強めた。彼は一群の人々にとつては魔法使のメルランであつた、しかし、それよりも前にその妖術で自分自身を魅了してゐたのである。彼はルネの子供達に爲すべき多くの仕事を殘した。私は十九世紀の作家達に於ける最も著名な叫びのいくつかを手短かに引用して、主な孤獨の形式と、その孤獨を深めた諸理由を明らかにしたい。

× × ×

シャトーブリヤンの二人の同時代人が彼らの孤立の性質を非常に綿密に決め、同時にその諸理由を探求してゐる。スタール夫人はしばらく措く。孤獨に關する夫人の透徹した思想を數語で摘要しなくても、夫人に就ては、色々な章で屢ゝ語るであらうから。そしてこの研究に大いに役立つことになるセナンクールについても、もし彼がオーベルマンなる人物に於て、當時のいはゆる「イデオローグ」の理論に混ずるに、抒情詩的、浪漫的な叫びを以てしてゐなかつたら、私はこれを暫く措いたであらう。私は理論家としての彼については、ここではまだ語らず、人と離れて若干の孤獨の叫びをあげる彼の慘めさを特質づけるに止める。以下はその叫びの最も重要なものである。「溫和な氣候、美しい場所、夜の空、特殊な音、昔の思ひ出、時、機會、美しい表情的な自然、崇高な愛情、すべてが私の前を過ぎた、すべてが私を呼ぶ、そしてすべてが私を棄てる。私はひとりである。私の心の力は傳へられず、內攻して、待つてゐる。私はこの世の、私にとつて何物でもない群衆の眞中にゐ、さまよつて居り、孤獨である。それはずつと以前に不慮の雪になり、自分の前を過ぎゆき自分の前にうごめくあのすべての物言はぬ生きものを貪るやうにぢつと見つめてゐる人の如くである。かかる人はすべてを見るが、すべてが彼には拒否される、彼は好きな音を見拔いてそれを

求めるが、彼の耳には聞えず、彼は世の中の物音の眞中にあつてすべての物の沈默に苦しむ。すべてが彼の所に現れるが、彼は何一つ捉へることが出來ないであらう。普遍的調和は外物に存し、彼の想像の中にあるが、彼の心の裡にはもはやない。彼は生きものの全體から離れてゐ、もはやそれとは接觸がない。すべてが彼の前に空しく存し、彼はひとりで生き、生ける世界には住んでゐない。」（シャルパンチェ版、一〇〇頁）。この頁を人間がその魂を結合する必要についての諸考察と比較してみよう。「人が人々を愛するのはその人々の如く感じるからである……彼は感ずるものすべてに結びつけられてゐる……孤立したものは決して完全でない……どんなものを所有しても、人と頒けなければ、それは我々の慾望をいらだたせるばかりで、心を滿してはくれない。心は育くまれず、惱み衰へるのみである。」殊に戀愛についての熱烈な讃辭をよみ返してみよう（二七九頁以下）。ルネとの非常な差が著るしい。オーベルマンはルネより心がゆたかで、傲慢が少い。サント＝ブーヴは文學についてのセナンクールの感想の一つを我々に傳へてゐる、セナンクールによれば文學は「すぐれた藝術、人間の幸福のために書く藝術」であつた。オーベルマンは傲慢なポーズで自己を他と區別しようとはしない。[一] 彼は浪漫的な主人公の痙攣や悲劇的苦惱を我々に見せずに濟ます。彼はともすれば夢が精神の盲目から來たりするのを警戒する。それに――後のヴィニーの如く――彼は夢想によつて自己を欺くことが出來ない。[二] 彼の慘めさはまづその心の裡に存し、それは與へたり、受けたりしたいといふ望みであり、その出來ない苦しみである。十八世紀の自由思想家達の子なるこの無信仰の人には、實際に、福音書的な慈悲のいぶきが通つたのである。そして彼はカバニスも、デステュト・ド・トラシも知らなかつた苦惱を有してゐる。

（一）「私は人々の眞中で、私のやり方を彼らのやり方に直接對抗させようといふのではない。」（八九頁）。

（二）「私は彼ら（人々）がその情熱に對して差し出したこれらのいろんな對象を想像の威力で美化したかつた……さうしたかつたが、出來なかつた。」（同上）。

何となれば彼の慘めさはまたその頭の中にもあるからである。それは心からと同樣に理性からも來てゐる。オーベルマンにはルネにない頭の冴えがあつて、彼はまづ自分の魂をはつきり見ようとし、外界にその身を融合させようとはしなかつた。彼はその危機の一つについて書いてゐる、「不決斷のこの日は、ともかくも光の日であつた……私は初めて自分自身を意識して樂しんだ……私はつひに私自身であつた。」わけても、彼は世界の神祕、運命の謎を解きたがる、曰く「私は享樂したくはない。私は望みを持ちたく、知りたい。」（八五頁）。彼は形而上學的な氣分を有し、その神祕への好奇心は神祕を解きえない苦しみに結びついてゐる。（一）人生の意味は何か？　世界の法則は何か？　理性は答へることが出來ない、そしてオーベルマンは人生の重大問題を前にして孤立を感じる。彼は行動したがつてゐながらそれが出來ないで、益ゝ孤立である、なぜなら頭が明敏でないところでは意志は何にもならないから。彼は幻滅者であり、同時に仕事のない人である。「人は自己の情熱を抑へ、そして必要なことをなす力を持てとのみいふ、しかしかくも多くの測りがたきものの中にあつて、必要なことを見せて欲しい。私はといへば、それを知らないし、他の多くの人も知らないのではないかと思ふ……恐らく確實な知識とか、知られた目的とかは、我々の性質にも、我々の要求にもそぐふものではなからう。しかも欲しなければならない。何に基いて意志を規定していいか分らないのに、常に意志を持たざるを得ないといふのは、悲しい必然であり、堪へがたい心配である。」（二二五頁）。オーベルマンは理性の孤獨と、心の孤獨に苦しんだ。彼は年代的に言つてわが夢を失つた心理解剖者の最初の人である。彼は頭の明晳

な點からいふと、バンジャマン・コンスタンやサント＝ブーヴの同類である。しかし彼には彼ら以上に感受性の不安があつた。そしてすべてかうした特質の結合によつてこそ、彼は後に述べるジュネーブ人アミエルと、殊にその精神上の子孫なるアルフレド・ド・ヴィニーをいくらか豫告するものである。

（一）この小説の殆ど到る所にある諸宗教、道德、自殺、靈魂不滅についての論議、及び豫感と夢とについての論議を參照。（二〇八頁）。

シャトーブリヤンよりも更にヴィニーは孤獨な魂である。精神的孤獨は彼にあつては純粹な感情ではなく、觀念となつてゐる、即ちこの詩人はそれを一つの法則として凡ゆる人々に及ぼしてゐる。一八二二年の彼の最初の詩集に於て、「モイーズ」*Moïse* はその偉大なるがために他の人間から孤立した天才人の悲慘を表はしてゐた。岩から泉を溢れ出させ、その民の通過にあたつて「水の滿々たる河」を退けさせたこの神から選ばれた人が、信者達から受けるものは、恐怖の混つた感歎ばかりである。彼は人間に近いためにはあまりに神に近い。彼は愛され幸福であるためにはあまりに偉大である。「私は皆の前を、光榮につつまれて悲しく獨り歩いた……」[一]そして讃歎すべき詩集『運命』[二] *Destinées* の根柢にあるのも生きとし生けるものの孤立についての思想である。「橄欖山」*Mont des Oliviers* (1843) は、神へ訴へてもその甲斐なき魂の宗教的孤立である。イエスは、その血みどろなる夜伽のとき、天を仰いで父なる神から自己の精神的慘めさに對する支へを獲ようとする、「されど天は依然として暗く、神の答はない」[三]。「牧人の家」*Maison du Berger* は就中――といふのはこの詩はかなり混雜してゐるから――自然を前にしての人間の孤立を表はしてゐる。この自然は浪漫派の人々は彼らの苦しんだ心の唯一の慰め手と思ひ込んでゐたかもしれない

が、我々の慘めさに對して如何にも冷淡で、我々の虛無（ネヒリン）に對して如何にもつれなく、如何にも他人であり、如何にも遠く、神と同じくらゐに遠い。（四）自然は人間を必要とせず、人間がうつろふことを知つてゐる、そして自然は人間が消滅した曉に樂しむ孤獨をあらかじめ誇つてゐる。最後に「サンソンの怒り」*Colère de Samson*（一八六四年一月十五日、『兩世界評論』誌上に發表、遺作）は、サンソンがダリラに欺かれたといふ象徵の下に、いつも變らぬ情熱の嘘と、戀愛に於ける人間の孤獨を表はしてゐる。（五）

（一）　あなたの息が牧人の私にかかるや否や、
　人々は云ひ合つた、「彼は我々とは他人である」と。
　そして彼らの眼は私の火のやうな眼の前で伏さつた、
　なぜなら、悲しい事に、彼らはそこに私の魂以上のものを見たから。

（二）ポール・ブルジェ氏は書いてゐる（*Etudes et Portraits*, ヴィニーに關する項）、「ヴィニーはただ一つの慘めさだけを歌つた。共にその祕密を交換する者を求めてえない、棄てられたプシシェ、決して自分の祖國とはならないであらう土地で、その姉妹に認められない不滅の流謫の女の慘めさだけを。」しかし「狼の死」*Mort du Loup*に於て不幸の中の孤獨を、「牧人の家」に於て幸福の中の孤獨を見るのはあまりに細末に拘泥することである。そして「その日こそ、神は凡ゆる魂の前に辯解しに來るであらう」といふ最後の審判についての日記の中の言葉をブルジェ氏のやうに註釋するのはよほど誇張である。即ち「……辯解すること、つまり我々の魂と自然との間には一の交通があり、從つてこの魂は孤獨でないといふことを示すこと。」

（三）　彼は寒かつた。わが父よ……と三度呼んだが、
　その甲斐はなく、答へるものは風の音のみであつた……
　彼は、なほも跪いて待ち望む……
　彼は永い間見つめ、永い間さがすが見えない。」

アミエルはこの詩の寫しのやうな敷行を、自分を認めない人間を前にしての孤獨な神について書いた。「愛する人人にさへ認められずにゐることは……神も惱みを感ずるとすればそれは我々が、しかも毎日、神の心を傷けてゐることになる。神も亦、神が殊に、無上に理解されずにゐるものである。」（「日記」、一八四九年五月二十七日、河野與一譯）。しかし既にこの思想はヴィニーにある。何故ならイエスが神の前に於ける孤獨な人間を象徴してゐるとすれば、彼はまたある意味で人間に認められない神でもあるから。次の對句をみよ、

ああ！私はまだ語つてゐるのに既に私の言葉は
比喩といふ比喩の中で毒に變つてしまふ。

（四）

私にはお前達の叫びも、溜息も聞えない。わづかに私は
空しく天に向つて物言はぬ見物人達を探し求める人間劇が
私の上を通り去るのを感じるばかりである、
……人は私を母といふが私は墓である。
私の冬はお前達の死人を多くのいけにへとして取り、
私の春はお前達の祟拜を感じない。（一八四四年七月十五日）

（五）

人間は常に愛撫と愛を必要とする。
……彼は町へゆくだらう、するとそこで狂氣じみた處女（なこめ）たちは
最初の言葉で彼を彼女らの奔に捉へるだらう。
そして多かれ少かれ女は常にダリラである。
……常に心に信の置けないこの伴侶
女よ、いくたびか汚れた病める子供よ！
……私は私の祕密を與へた。ダリラはそれを賣るだらう。

ヴィニーの苦惱の根柢は、優れた人間の孤立である。それは孤獨の全部ではないが、しかしその原則である。人間世界に於ける流謫は、卓絶なるものの受ける宿命的な代償、天才の罰、として詩人に見える。ヴィニーはその詩「モイーズ」について云つた、「私の詩の何れも私の魂の全部を語つたものはまだない、しかし若し私が他の詩よりも好む

詩がありとすれば、それは「モイーズ」である……この偉大な名は凡ゆる世紀の人、しかも古代よりも近代の人に對して、假面の役割をしてゐるに過ぎない。」（一）この孤獨の諸動機はヴィニーが凡ゆる天才の中でも眞の優れた人間であるとなす「詩人」の傲慢だけによつてあまりにも一般的に、あまりにも便宜的に說明されてゐるが、これについては後に明確にしよう。ヴィニーが傲慢だつたのは確かである、――それに藝術家といふ藝術家が聖なる使命を果してゐると思ひ込んでゐた時代にあつて、一體誰が傲慢でない者があつたらう？　とはいへ私は彼の個人主義が言葉の輕蔑的な意味の傲慢からのみ來たものではないことを指摘したい、即ち私はそこにまた、わけても自己を投出すことを好まない人の愼ましさと、名譽、それよりもむしろ貴族として軍人としての名譽と、そして病から來る苦しみと懷疑から來る苦しみを義務として受け容れる事を命ずるストイシスムとを、見る。この優れた人はそれほど社會から離れてはゐなかつたので、なほそれ故にこそ彼の精神的孤獨には一つの非常に特殊な非常に高貴な形が與へられたのである。

それは何よりも先づ心の孤獨と愛の缺乏とであり、また、優れた人はその愛情を與へることが出來るが、そのめぐみとその愛の報いは受けないといふ感情である。モイーズが不幸なのは充分に稱へられないからではなくて、稱へられ過ぎるからである。彼はその民の眼に對して、自分の中の人間が天才のために隱れてゐるのを歎く、かくてこの詩は認められない才能の慘めさを表はしてゐるのではなく、理解してもらへない心の苦しみを表はしてゐる。ヴィニーがその思想を傳へるよすがとした象徵的な人々の姿は雄大ではあるけれど、それでも憐憫を求めるといふ點に於てやはり實に人間的であり、實にハンブルであり、實にいたましい。（サンソンとイエス）。そしてこれらの主人公達は人間に光を與へ人間の苦しみと迷ひを癒さうと望んでゐることによつて更に人間的である。彼らの孤立が深められる

のは却つてそのためですらもある。彼らが求めるものは凡て彼らが既に與へたものに外ならない。モイーズが「その眼ざしを上げる」のはその民が苦しんでゐる時である、そしてゲツセマネの園に於ける父なる神へのイエスの祈りも人間の苦しみのために捧げられたものである。

しかしかう言つたのではまだ足りない。優れた人は單に個人的な苦しみだけを有してゐるのではない、自分とは離れてゐる人々に對する憐憫と、強く働く愛情だけを持つてゐるのではない、彼はその外に、人類の最も烈しい苦しみを知つてゐる。彼は或る種の慘めさによつて「人間」となる、そしてそれ故に私が言つたやうに、ヴィニーの精神的孤獨の少くとも一つの形はもはや例の少い慘めさではなく、少し反省しようと思ふ人なら誰でもが感じる苦しみであつた、即ち人生の謎を前にしての知性の孤獨である。我々は我々がどこから來たのか、どこへ行くのか知らない——そして私はオーベルマンの不安が橄欖山の祈りの中に表はされてゐるのを認める。ここではイエスはもはや優れた人ではなく、人間であり人間として語つてゐる。彼が我々の運命の神祕を明らかにするについてのあの無力を普通人よりも痛切に感じるのは、優れた人は普通人以上に思想によつて生きるものである故に大衆よりもはつきりと問題を提出し、その問題を大衆よりも屢々頭に浮べてゐるからである。また大衆よりも多くの問題を明らかにすることによつて、自分で解けない一つの問題にぶつかる辛さを餘計に感じるからである。そして最後に、人々を導く使命を帶びてゐることを思ふと、彼の知性の孤獨はその責任の苦しさとその愛情の失敗とによつて複雜化するからである。しかし要するに、わけても、そして第一に、イエスの呼びかけの中には、全人類の呼びかけと、宗教的觀念に苦しんでゐる人人のいつも變らぬ祈願とがある。宗教的觀念に苦しんでゐる人々とはつまり殆ど凡ての人々である、なぜなら「人間、

考へる人間があつてから七千年以上」このかた、死ぬ前か或は死に臨んで少くとも一度この問題を考へなかつた者はないと私は思ふから。

そしてこの故に精神的孤獨はヴィニーに於てかくも深刻な代辯者を見出したのである。彼は精神的孤獨を優れた人として――また人間として感じた。といふのは、彼が「サンソンの怒り」と「牧人の家」とによつて表はした戀愛と自然との裡に於けるあの人間の孤獨はこれまた人間的な苦しみではないか？　人類は「宇宙の小さな地牢の中の」、小さな土くれの上に流された者として彼には見える。人類の上にも周圍にも何一つない。神はこの樂園にあつて語らず、自然は空虛である。この人間社會には男や女があつて互に混り合つてゐるやうに見えるが、實は緣のない敵同志の二つの陣營に分れてゐる。そしてこれらすべての孤獨の眞只中にあつて優れた人は他の凡ての者以上に流人であり、（一）また詩人は凡ゆる天才人よりも更に流人である、なぜなら詩人は知性の不安については他の人々と同じであるとしても、他の人々以上に心の孤獨を有してゐるから。

（一）ヴィニーが描いた偉大な象徵的な人々の姿（モイーズ、サンソン、イエス）は個人主義と人間味との混淆によつて興味がある。イエスは人間として苦しむ、なぜなら彼は神を前にしての人類の象徵であるから。そして彼は優れた人として苦しむ、なぜなら彼は人間の間に於ける神であるから。

それ故に愛に對する要求がヴィニーを人間の方へ向け、愛の缺乏が彼の慘めさをなした。ヴィニーは優しい人であつた。しかしミュッセの精神的孤獨の中には、より以上の心理的意味を持つてルネの利己主義が見出される。疑ひもなく、この世紀の偉大なる孤獨な人々の間にあつてこの詩人に出遭ふのは少し驚くべき事である。彼の生活は、なほ

彼の戀愛哲學とともに、彼をして孤立を免かれしめる苦であつたらう。人も知る如く彼は先づ遊蕩の中にその屈托のない青春を蕩盡した、そしてそれに厭きが來始めた時になつて、一の熱烈な戀に出會してその心を滿たし、次いで危機が到來し、女に對する輕蔑とまた自己に對する輕蔑とが起ると、彼は次のやうな信念によつて幸にも半ば慰められた。即ち追憶は情熱よりも樂しく、人生の幸福は愛する事にではなく愛した事にあるといふ信念である。女との遊び、それから多くの戀に次ぐ戀、そして最後に、消え去つた戀の喜びへの、老いゆく心の魅力ある復歸、すべてさうしたものがミュッセの生涯を占めてゐる。そこには官能も、心も、想像もなほざりにはされてゐないやうに見える……ではファンタジオのあくびは何に起因するのか？　舞臺に上せては少し失望させられるが、讀んでゆくとあんなに綺麗なこの人を惹きつける戲曲において、青い國の小さな王女の結婚のためにミュニクで催される祝宴の最中、生の倦怠を引き摺つてゐる若いブルジュワのファンタジオは、その倦怠の原因を女のスパルクに打ち明ける。スパルクは大酒のみで、喫煙家で、少し下品な陽氣な男であり、憂鬱なファンタジオの打ち明け話に面喰らはずにはゐない。

「一時間か二時間でいい、僕の皮膚から外に出られたら！　あそこを通つてゐるあの人になれたら！……きつとあの男は僕には全く緣のない無數の考を頭の中に持つてゐるだらう、あの男の本質はあの男に特有のものなのだ。ああ！人間がお互ひに言ひ合ふ事はみんな似てゐる、人間が交す考へはどんな會話ででも殆ど常に同じだ、だけどこれらすべての孤立した機械の內部には何程の襞、何程の祕密の仕切りがあることだらう！　めいめいが自分の裡に全く一つの世界、默つて生れ死ぬ一つの知られざる世界を持つてゐるのだ！　これらすべての人間のからだは何といふ孤獨なものであらう！」

「杯と唇」*Le coupe et les lèvres* の中で、合唱隊はフランクに云ふ（第一幕、第一場）。

空の光線なる、眼に見えぬ囚はれの魂は
その牢獄で血みどろの苦惱に苦しむ。
その流謫の地の奥から魂は姉妹をさがす
かくて互に呼び交すこれらの神の娘らの
永遠のこゑこそは涙と歌である。

魂は呼び交す。しかし答へ合ふであらうか？　ミュッセはさうは信じない。魂は魂にとつて測り知れないものである。そして我々各人の人格は後生大事にその祕密を守つてゐる、わけても詩人の魂は孤獨であり理解されない、と彼は信じてゐる。我々の意志はどうであらうと、我々は自己を全部投げ出すことは出來ない。我々が流す涙は我々の本當の涙ではない。しるしとなるものはすべて嘘であり、言葉は考へを欺き、眼の陽氣さは心の喜びをいつはる。我々は陳腐な事を交すより仕方がない。だからファンタジオはあの祕密の仕切り、デュ・デファン夫人のバネ仕掛の機械を思はせるやうなあの孤立した機械について語るのである。（一）

（一）後段、第一章第一節をみよ。

なほ、彼の苦しみの中には人間に對する共感は何もない。彼は人間のことなど氣にかけないのである。彼が歎くのは、人々と交通出來ないといふことよりも自己を知り過ぎてゐることの退屈さ、そして良心の檢討を加へるたびに、同じ感情や同じ觀念の單調さを自己の裡に見出すことの退屈さである。彼は自分にのしかかつてゐる人格を振りほどくために一時間か二時間かその皮膚を出たがる人である。彼がその告白を續けるのを聽いてみよう、「わが愛する友

よ、僕の腦味噌に比べればこの町などは何でもない。僕の腦味噌の凡ゆる隅々を、僕はこの町の隅々より百倍もよく知つてゐる。僕の想像力の凡ゆる街、凡ゆる穴は、この町のそれよりも百倍も疲れてゐる。僕だけがその唯一の住人であるこの害はれた腦味噌の街々を、僕はこの町の街以上に縱横に歩き廻つた！　僕はそこのあらゆる居酒屋で醉つぱらつた。僕はそこで絶對君主みたいに金色の馬車を乘り廻した。僕はそこで立派なブルジュワ然としておとなしい騾馬に乘つて歩いた。そして今では泥棒のやうに、龕燈を手にしてそこへはひる勇氣すらない。」ファンタジオの孤獨は心の目ざめではない、道を通る人と意氣投合したいとの望みではない。私はそこに放蕩者の疲れと心理解剖者の倦怠を見るのみである。ファンタジオは自分以外の者でありたがつて居り、他の人々と共に生きようとは一瞬だに考へない。彼の叫びは絶對に利己的である。彼は家主を追拂ふといふ條件でならば、喜んで自分の家以外の家に住むであらう。彼はこの點に於てよき浪漫主義者である。わが浪漫主義者達が歴史的人物を蘇らせようとする時には、通常、その人物に自分達の人格を宿らせようと試みるか、或はその人物の人格を盜んで自分達の自我を大きくしようと試みる、いづれにしても彼らは併合を好むものであつて、人間的なるものの一として彼らに無緣なるを欲しない。然るに彼らは必ずしもそれに成功しないために、自らを孤獨であると稱し、自分自身の裡に閉ぢ籠つてゐるといつて呻く……これが、安ピカ物をつけた人が通るのを見た時のファンタジオの孤立である。彼は「これらすべての人間のからだ」の孤獨さを歎いてゐるやうに見えるとはいへ、彼の關心を惹くものは彼自身の苦しみだけなのである……彼は自分の魂を他の人々の魂に近づけ、かくて自分が生きてゐる世界を理解せずまた世界から理解されない程度を少くするために努めようとは一瞬だに考へない……否、彼は他の人々の本質をなす凡ゆる感情、凡ゆる感覺、凡ゆる夢、凡ゆる觀念が自分の中へ

移るのを見たいと望んでゐる、だが彼の幻想は空しく、彼は同じ自我に結びつけられて離れられないと感じてゐる。

ファンタジオはあまりにも感情で生きたことに苦しむ。彼は凡ゆる感動を使ひ果したのである。彼はつひに心の限界を感じ、絶えず情熱を新しくすることの不可能を感じる。彼は倦怠の中に徐々に衰へてゆく。彼はもはや何ら新しいものに出遭はないであらうといふこと、そしてまだ歡樂が見つかるとしてもその歡樂でさへ速に過ぎ去り、魂は滿たされないままに殘されるであらうといふことを知つてゐる。彼の孤獨は人間が不用意にもその心を托した人々から欺かれるといふ感情ではもはやない。それは、無限にあこがれ、人類を戰かせたあらゆる感情を身を以て感じうると思つてゐる矢先に、非常に限られた感受性を自分の裡に認める苦しみである。（一）

（一）私はミュッセにあつて極めて珍らしい孤獨の一つの形については語らなかつた。卽ち戀愛の場合の、肉體の結合に際しての魂の孤獨である。彼の『世紀兒の告白』の中に「お前の脣がかれの脣に觸れてゐたとき……お前達は全世界によつて隔てられた地球の兩端の二人の流人よりも互に遠くゐた。」とある。これはモーパッサンに於て外ならぬ戀愛の哲學となることになる。

（未完）

譯者記。　ここに譯したのは René Canat の學位論文 *Du Sentiment de la Solitude morale chez les romantiques et les Parnassiens* の序文の前半、浪漫派に關する部分である。後半はパルナシャンに就てまづ述べ、次に兩派の記載の中に洩れた文人を取り上げてゐる。

一九〇四年に Hachette 書店によつて印刷されたこの書はぢきに所謂稀覯書となつてしまつた。其の後當然あるべき再版等のことを絶えて聞かないのは、出版者側の何かの理由によつてか、或は又作者自身の意志によることであるかも知れない。

私が此の書を手に入れたのは一九二八年であつたと記憶する。それから今日まで約十年たつた。凡そ西歐に行はれた書で多少人の話題に上るものは悉く飜譯して了らなければ止まない我が國で、この書の飜譯の今迄に現はれないのは、その容易に入手

し難いのも原因の一をなしてゐると思ふ。私は最初、原書を覆刻して、同好の士に頒つことを考へたが、事の容易でないのを知つてそのままになした。而も全篇を譯出するに至つては、少く共、私には更に難事である。今思ひ立つて序文を譯してみたのは此の中にほぼ全篇の内容を覗ひ得るからである。尚、本書の目次を寫すと左の如くである。

Avant-propos.

Première Partie

L'Isolement dans la Société

Chapitre I. L'Homme supérieur.
— II. La Pitié dans Mme de Staël.
— III. La Solitude de l'esprit chez l'écrivain.
— IV. La Solitude morale du Poète romantique.
— V. Le fondement psychologique de l'esthétique parnassienne.

Deuxième Partie

L'Isolement dans l'Univers

Chapitre VI. Les Voix consolatrices et l'échec du romantisme.
— VII. La Sympathie esthétique du Parnasse.

Troisième Partie

Le culte du Moi et la Solitude

Chapitre VIII. La Solitude des Regrets chez les Romantiques.
— IX. Le sensualisme parnassien et la ruine de la vie intérieure.

Conclusion